3．中学3年

'97年度中3総合人間科学習の報告

鈴　木　一　悠

【抄録】　生徒にとっては総合人間科学習第3年目である本年は、第2年目である昨年とは異なるテーマの下で行った。昨年、本年の2年間で本校の設定したテーマの取り組みを終えたことになる。学習の方法は昨年と本年とで同じようなものになってしまった。「本年はこういうテーマに基づいて1年間学習します」と言ってテーマを示す示しかた（テーマ設定の仕方）が1年間の学習の成果を決めると言ってもよいほど大きな問題であることを知った。

【キーワード】　国際化社会　体験　他者理解

はじめに

'97年度中3生は、総合人間科学習を3年間行ったことになる。第1年目である'95年度は総合人間科学習の導入の年であり、どういう学習なのか、どういう仕方で学習するのかを学んだ年であると言える。第2年、第3年が、総合人間科学習を中学生に対して本格的に行うことが意図された年であった。本校は総合人間科学習を始めるに当たって、テーマ（総合人間科学習の目標を達成する上で取り組む範囲）を決めていた。1つは「生命・環境」であり、1つは「国際理解・人権・平和」であった。そしてこれらのテーマを中学生にも、高校生にもあてがった。そこで'97年度中3生は'96年度に「生命と環境」というテーマで、'97年度は上記第2のテーマを学年団が表現しなおした「国際化社会に生きる私達－体験を通して考える他者理解」というテーマで総合人間科学習を行った。

学習の展開

中学3年では「選択教科」なる時間が週1時間あるが、本校ではこれを「学年団が行う授業」と位置づけて行ってきた。'97年度もこれにならい、「選択教科」と「総合人間科」を同一視して、週2時間総合人間科学習を行った。学習の展開は、先に記したテーマ「国際化社会…他者理解」を実際に行う機会をできるだけ多く提供するという方針で行った。いつどんなことをしたかを略記すると以下のようになる。

インターネット紹介（4／24、5／2）

これは、現今では内外の政治や文化を、パソコン上で見ることができることを体験させたもので、ホームページへのアクセスの練習をした。首相官邸とかルーブル美術館とかを見ることができたが、後に行う修学旅行との関係で、広島市役所と原爆資料館は必ず見るようにした。

ブラインド・ウォーク（5／8）

2人が1組になり、1人がタオルで目隠しをし、もう1人が手をとって誘導するというもので、校内で行った。自分が誘導された場合に感ずることであるが、自分を誘導する者を100％信頼しないことには恐ろしくて足を踏み出すことができない。この学習は、隣人との関係で相手の身になって考えるという体験になったであろう。

ラインナップ（5／15）

これは、教室のような会場に直線を設定し、食べ物でも何でも（自然物の）名前を挙げて好き嫌いの度合いに応じて生徒がこの直線の上に並ぶというもので、物事への好き嫌いは各人各様であることを知ることができたものと思われる。

名古屋大学留学生との交流（5／31）

13人の留学生に来てもらうことができ、ゲームをしたり、質問に答えてもらったりした。異文化に実際にふれ、理解が進んだものと考えている。

映画「黒い雨」を（6／7）、ドキュメンタリー「人間を返せ」を（6／12）いずれもヴィデオで見た。どちらも修学旅行事前学習として行った。

身近なトラブルについて発表・討論（6／12）

これは生徒各自が自分自身に起きたトラブルを差し支えのない範囲で発表し、聞いた者が自分の意見を言うというもので、トラブルの原因と他者理解の欠如との関係に思い至ったものと期待している。

このあと

修学旅行準備（6／26～11／4）

修学旅行およびそのまとめ（11／5～11／13）

公開授業の発表準備、公開授業とその反省（11／13～11／27）

研究集録（修学旅行班別研究の部）作成（11／27～1／20）

個人研究および研究集録（個人研究の部）作成（1／29～2／21）

と続く。

上記のごとく、修学旅行（目的地　広島市と国民休暇村大久野島）を、過去2年そうであったように、総合人間科の中に取り込んで行った。というよりも、'97年度では修学旅行は総合人間科学習の主要部分になった。国際間で「他者理解」を放棄した時の最悪の結果が戦争であるというのが、学年団の戦争のとらえかたであったし、修学旅行中班別に行ったフィールドワークこそ他者理解を体験する最大の機会と考えていたから、修学旅行を総合人間科学習の中心に据えたのは学年団にとってはごく自然な成り行きであった。さて、この学年団の思惑はどれだけ的を得ていたか、あるいは的外れであったか。このことは、生徒達がどういうフィールドワークを行ったかを知れば分かるであろう。その場合、フィールドワークの内容に立ち入らなくても各班のフィールドワーク研究テーマからだけでもおおよそのところは分かるであろう。班ごとの研究テーマを次に記す。

A班　1班　広島の被害と文化
　　　2班　広島の食品流通
　　　3班　戦時中の人々の本心を知る
　　　4班　原爆の被害影響と課題
　　　5班　広島の街並と食文化
　　　6班　広島について
B班　1班　戦争心理
　　　2班　広島の今と昔
　　　3班　語りかけるヒロシマ
　　　4班　戦時中の人々の気持ちを知る
　　　5班　ぶらり広島　味紀行
　　　6班　広島の美術を味わう

A組2班はどうして広島まで出かけて食品流通を研究する必要があったのか、同じように、B組5班はどうして味紀行をする必要があったのか。研究テーマは班員の討論の結果決まったものであるから、各班のテーマ決定の段階で学年団はどの班に対しても、テーマ変更を求めなかった。しかし、どの班に対しても、フィールドワークの中に「他者理解」の場を設けることを求めた。実際　A組2班の場合だと訪問先である広島市中央卸売市場で対応していただいた職員に、仕事をする上の喜びと悲しみを尋ね、これに対して率直な心情を聞かせてもらっている。それでも、広島へ出かけたのだから、戦争と平和の問題を真正面からテーマとして取り上げて欲しかったという思いが残る。

公開授業発表は、上記修学旅行班別フィールドワークの成果を参加者に聞いてもらったものである。発表の方法がなっていなかったとの批判を得た。確かに、彼らの昨年における同場面とくらべて進展がなかった。「他者理解」は相互的なものであり、他を理解すると同時に、自分が他から理解されることでもある。そして自分が他から理解されるためには、自分を表現する方法が適切でなければならない。この点からも、上記の批判は率直に受けとめねばならない。しかし、公開授業の運営を全部自分達の手で行ったこと、発表の中で、フィールドワークをして考えたこと・気づいたことを述べることをどの班も落とさなかったことは評価しなくてはならない。

集録作成（修学旅行班別研究の部）は、フィールドワークを文章によって再現しようとしたものである。

個人研究は、ブラインド・ウォーク、ラインナップ、留学生との交流、身近かなトラブルについて発表・討論、修学旅行がいずれも複数の人数でテーマ「国際化…他者理解」を実行しようとしたのに対して、個人のレベルで実行しようとしたものである。個人研究のテーマに何を選ぶかについては、学年団は、これまでの総合人間科学習で行ったこと・経験したことから1つを選んでさらに深めることを勧めた。例えば、修学旅行班別研究をさらに深める　のように。実際に生徒達がどういうテーマを選んだかを次に示す。

目に見えない人の苦労を知る
従軍慰安婦について
世界の学校の事情
人種差別について考える
輸入食品
平和な国際関係
国際ボランティアについて
フランスについて
国連のしくみとはたらき
日本の悲惨な行為
中学生の心理と世間からの「中学生観」
対人地雷問題について
物事を効果的に伝える法
未成年のたばことガンのかかわり
障害者に対する障害と差別
毒ガス製造工員の心を知る…
人種差別について
子どもの服のこと
特別攻撃隊について
未成年の性問題〔売春行為〕
大久野島の毒ガス

国際化の進んだ国や人々
税金の理想と現実
国際交流を深める名古屋
アメリカと日本のちがい
ガンと戦った人
命と健康を守る仕事について
NAGANO
ユニセフ（国際連合児童基金）について
国連と平和
アウシュビッツ収容所
外国人労働者の人について
ケースワーカーについて
子どもが失っているもの
ユニセフってなぁーんだ？
サーカスについて
ユダヤ人差別問題について
ヒトラーとナチスについて
テーマはクラスの問題でしょう。
文学から見る広島
同性愛について
日本にいる外国人のこと
援助のあり方
ブラインドウォークをしてみて
障害を持っている人達の思いを知る
－視覚障害の場合－
貧困と飢えの克服
精神病の人達の人権
日系４世のポール・カリヤについて
戦争の映画
聴覚障害者の苦労
原子爆弾について
すぐキレる中学生
人々の平和
留学生の生活とアメリカの学校生活
核開発の科学者達
私達が考える将来の夢
スウェーデン人はいま幸せか？
－福祉について考えてみる－
貿易
国連のしくみと歴史
監獄
日本と近隣諸国との関係
－私達は他の国をどう思っているか－
身体障害者の方々を知ろう
毒ガス工場と戦争のつながり
ことわる勇気　麻薬・覚醒剤はNO
いじめについて
強制収容所アウシュビッツ
国際化社会への私達の考えとそのちがい
西オーストラリアについて
原爆に対する意見のちがい
半世紀前の原爆投下に対する現在の人々の意識
たばこについて
クスリの作用と危険性および種類について
聴力障害
韓国の簡単な食事マナーについて
真珠湾攻撃について
覚醒剤について
毒ガスについて
核廃絶への道

以上の個人研究テーマの中には、テーマ「国際化…他者理解」の範囲に入っているとは考えられないものがある。この生徒の場合、年間通してテーマ「国際化…他者理解」の下で総合人間科学習をしたとは言えない。

おわりに

本校が決めた総合人間科展開上の２つのテーマ「生命と環境」および「国際理解・人権・平和」は、現在の中学生、高校生がこれから生きてゆく上で、理解していなくてはならない・承知していなくてはならない・身につけていなくてはならない、最重要な課題である。そして先に書いたように中３学年団は、第２のテーマ「国際理解・人権・平和」を「国際化…他者理解」と表現しなおして実行した。結果は、学習の展開のところに書いた通りである。生徒には、この１年間の総合人間科学習では何をするのか、毎時間の授業で何をすることが学年団から求められていたのかが充分分かっていたとは思えない。個人研究をする時期になっても「他者理解って何のことですか」と尋ねた者さえいた。原因は、テーマ「国際理解・人権・平和」の取り組む上での難しさと共に、学年団の行った設定「国際化…他者理解」にあろう。テーマ「国際化…他者理解」については、１年間の総合人間科学習展開の節目節目に、何度も説明した積もりである。しかし浸透しなかった。テーマ設定は「聞いただけで、読んだだけで、一年間何を学習するのか分かる」ように行わねばならないようだ。